

## 令和7年5月の解説（府県天気予報）

### 【5月の天候状況】

上旬は、全国的に天気は数日の周期で変わったが、西日本中心に高気圧に覆われやすかった。このため、旬間日照時間は西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。1日から2日に本州南岸を、9日から10日に日本海をそれぞれ低気圧が通過した影響で、東・西日本を中心にまとまった雨となり、大雨となった所があった。このため、旬降水量は東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、北日本太平洋側と東日本日本海側で多かった。沖縄・奄美では、前線や湿った空気の影響を受けやすく、10日には活動の活発な前線の影響で大雨となった所があった。このため、旬降水量はかなり多く、旬間日照時間は少なかった。旬平均気温は、北日本は暖かい空気が流れ込みやすかった一方、東・西日本では寒気の影響を受けやすかったため、北日本で高く、東・西日本で低かった。

中旬は、北日本から西日本では天気は数日の周期で変わったが、旬の後半は西日本太平洋側を中心に、九州南部から本州の南海上に停滞した前線の影響を受けやすかった。九州南部は16日頃、奄美地方は19日頃に梅雨入りしたとみられる（速報値）。このため、旬間日照時間は西日本太平洋側で少なかった。北・東・西日本日本海側と北日本太平洋側では低気圧や前線の影響を受けにくかったため、旬降水量は少なかった。沖縄・奄美では、旬のはじめと終わりは前線や湿った空気の影響を受けたが、そのほかの日は高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬間日照時間は多かった。北・東・西日本では暖かい空気が流れ込みやすく、旬平均気温はかなり高かった。東日本では旬平均気温年差が+2.2℃となり、1946年の統計開始以降、5月中旬として1位の高温となった。沖縄・奄美では旬のはじめは寒気の影響を受けたが、その後は暖かい空気が流れ込んだため、旬平均気温は高かった。

下旬は、北日本では21日から22日頃に日本海の停滞前線や30日から31日頃に前線を伴った低気圧の影響を受けやすかった。このため、北日本日本海側と北日本太平洋側では旬降水量が多かった。東日本と西日本では21日から22日頃に九州南部から本州南岸に停滞した梅雨前線や前線上の低気圧や、24日から25日頃に本州付近を、29日から31日頃にかけて本州南岸をそれぞれ通過した低気圧の影響でまとまった雨となり、大雨となった所があった。このため、旬降水量は西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側では多かった。旬間日照時間は、東・西日本太平洋側ではかなり少なく、東・西日本日本海側では少なかった。東日本太平洋側では旬間日照時間年比が44%となり、1961年の統計開始以降、1963年と並び、5月下旬として1位タイの寡照となった。沖縄・奄美では、梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすかったため、旬降水量は多かった。沖縄地方は22日頃に梅雨入りしたとみられる（速報値）。また、旬のはじめ頃は暖かい空気が流れ込みやすく、全国的に気温が上がり、21日には真夏日を観測した地点も多かったが、中頃以降は寒気の影響を受けやすかった。このため、旬平均気温は東日本と西日本では低かった。

## 【5月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は例年値(注)より10ポイント低い78%で、明後日予報は例年値より6ポイント低い79%となった。地方別の適中率では明日予報は北海道、関東甲信、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州北部、九州南部地方では例年値を下回ったが、その他の地方では例年値と同じか例年値を上回った。また明後日予報は北海道、東北、関東甲信、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州北部地方では例年値を下回ったが、その他の地方では例年値を上回った。

同じく17時発表の天気予報による明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.4℃小さい1.2℃で、関東甲信、東海、北陸、近畿、中国、沖縄地方では例年値より大きくなったが、その他の地方では例年値と同じか例年値より小さくなった。また、最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値と同じ1.2℃で、中国、沖縄地方では例年値より大きくなったが、その他の地方では例年値と同じか例年値より小さくなった。

(注) 例年値は2015年～2024年の平均値です。

## 【7月の天気予報の利用にあたって】

平年では、7月の中旬～下旬に、九州地方から東北地方にかけて梅雨明けとなり、梅雨明け後は本格的な夏が始まります。しかし、7月は梅雨末期の大雨が起こりやすい時期でもあります。早期注意情報(警報級の可能性)や最新の気象情報、警報・注意報、キキクル(危険度分布)などに留意してください。